副詞「随分」などについて

播磨桂子

はじめに

副詞「ずいぶん」は、「随分」という漢語であるが、「かなりの程度」をあらわす程度副詞として、漢語であることはあまり意識されない、日本語のなかになじんでいる語である。この語が取り入れられてからの歴史は長いが、古くは現代語とは異なる用法がみられる。

明治時代以降の「随分」の用法変遷については、佐伯哲夫（1980、1989）の論考があり、「できるかぎり」の意義をもって、意志や命令・依頼などのムードに係る用法、および「大いに、十分」の意義のもとに話者の予測に関わっている用法、すなわち主体的・主観的なものへ係っていく意義用法が衰滅し客観的なコト・モノ・サマに係り、頻度や量や程度が相当、かなりであることを示す用法に限定されてきたことが述べられている。[注1]

また小学館『古語大辞典』の「随分」の項に、その文字通り、分に随うの意で使われたのが、自分としての出来る限りということから、「大いに。すこぶる。かなり」また「出来るだけ。精一杯。せいぜい」の意に転じたという語誌が前田富祺氏によって、示されている。ここにはさらに「相応するという意の『相当』が程度の甚だしい意になり、身の程を示す『分限』が身の程を超えて金を持つ金持ちの意になるなど、類似の例が多い」と述べられているが、「相当」などは、現在「随分」と程度副詞として類義語である一方、「千円相当の品」「この罪は死罪に相当する」といったように、相応するという意味でも用いられている点で興味深い。[注2]

一

まず問題となるのは「随分」の漢語としてのもともとの意味用法であるが、『大漢和辞典』には次のように記述されている。

①分に従ふ。分相応。
②當然さうである。もちろん。唐詩に習用した當時の口語。
③すこぶる。よほど。かなり。相当。

このうち③は、日本語として独自に生じた意味であるとされる。漢籍・仏典に見られる用例は次のとおりである。

(1)草木叢林　随分受潤〈草木叢林　分に随ひて潤を受く〉
（妙法蓮華経巻第二）

(2)随分笙歌聊自楽、等閑篇詠被人知

(3)随分獨眠秋殿裏　遥聞語笑自天来　（白氏文集巻二十四、重答劉和州詩）
(4)向誰曾艶冶　随分得聲名　（佩分韻府、羅隠題蘇小墓詩）
(1)および(2)の例は、「分に随う」の意で用いられているものであり、(3)および(4)は大漢和辞典の②の用例としてあげられているものである。

この漢語「随分」には、「ナフサナフサ」などの和訓が施される。(2)の白居易の詩句は、和漢朗詠集にも採られているが、次にあげるとおり、語形の相違するいくつかの訓がみられる。（＜＞内に訓を記す。〈右側・左側〉[注3]）

a．随分〈ナフサ〈〉・ナツサ〈〉〉（専修大学図書館蔵建長三年・正元元年写本和漢朗詠集）
b．随分〈ナフサ〈〉・〉（岩瀬文庫蔵延慶二年本写本和漢朗詠集）
c．随分〈ナフサ〈〉・ナツサ〈〉〉（天理図書館蔵貞和三年写本和漢朗詠集）
d．随分〈ナフサ〈〉・〉（山田俊雄教授蔵寛正四年本和漢朗詠集）
e．随分〈ナツサ〈〉　ナブサ〈〉　ナウサ〈〉・〉（室町期写教順本和漢朗詠集）
f．随分〈フサ　・ナツサ〈〉　ナツサ〈〉ノ（国立国会図書館蔵菅原長親本和漢朗詠集）
g．随分〈オフサ〈〉ノ・〉（墨流本和漢朗詠集）
h．随分〈ナブサ〈〉ノ〉（内閣文庫蔵和漢朗詠集私注）
i．随分〈・ナウサ〈〉ノ〉（金沢文庫本白氏文集　四）

これらの語形間の関係については、片仮名の字形の類似から、ナとオ、ウとツが紛れたものか、ナツサはナフサの促音便形か、別々の同義語が存在するのかなど、いろいろと考察すべきであるが、まだ解答を得られないままである。

伊勢物語九十三段の、「あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高き卑しき苦るしかりけり」の「あふなあふな」という語に、伊勢物語・真名本において「随分」があてられており、「なふさなふさ」との親近関係が説かれている。この語にも、「あふなあふな」が「あぶなあぶな」か、清濁両説のある点など興味深く、併せて考えたい。

二

平安時代の和文資料では、源氏物語に次の三例がみられる。

(5)たゝうはへはかりのなさけにてはしりかきおりふしのいらへ心えてうちしなとはかりはすいふんによろしきもおほかりとみ給れと…（源氏物語・帚木）
(6)三条らもすいふんにさかへてかへり申はつかうまつらむとひたいにてをあてゝねむしいりてをり（源氏物語・玉かづら）
(7)女このかはりにと思よろこひ侍てすいふんにいたはりかしつき侍けるをかくなりたれはうらみ侍なり（源氏物語・手習）

係り先は(5)「よろしき」(6)「さかへて」(7)「いたはりかしつき侍ける」で、現代語の「随分」などの程度副詞のかかり先と変わらないが、いずれも、その身分や才能などの「分相応に」の意をもって使われている。ただし文字通りの分相応ではなく、その「分」に応じた精一杯という意味合いが強く、プラス方向の程度を感じさせる。そこで形容詞などの状態性の語に係る場合には、その状態の程度がかなりである意味を示す方向に傾き、動作性の語に係る場合には、

その動作を「できるかぎり、精一杯」行う意味に傾いていったのではないかと思われる。

今昔物語集には源氏物語と同様の「随分に」が用いられているほか、「随分ノ貯」という連体修飾の例が見られる。現代語の「相当」も連体修飾に「相当の」の形をもち、連用修飾形として、「相当に」が用いられるところ、文法的振舞いが共通するが、まだ助詞をともなわずに程度副詞として働く用法はみられない。

(8)妻子、此レヲ聞キ泣キ悲ムデ、随分ニ貯ヲ投棄テ、心ヲ至シテ法華経一部ヲ書写供養シ奉リツ（今昔物語集・巻一三・四四）

(9)亦、真言ヲ持テ年来行フ間、随分ニ其ノ験有リ（今昔物語集・巻一四・二五）

(10)年来随分ノ貯ヘ仕タレバ、此マデ疑ヒ思食シテ仰セ給フコソ口惜ク候ヘ（今昔物語集・巻二八・三一）

以後、鎌倉時代の文献にも、次のように「分相応に、それぞれに応じて」の意味で使用されている例が見られる。

(11)内〳〵ノスヱザマノ人ノ家ノヲサムルヤウモ、タヾオナジコトニテ、随分〳〵ニハアルコトゾカシ。（愚管抄・巻第四・後三條）

(12)人ハ随分ニ皆、我本意ハトグル事ナルヲ、スグル案ヲタヾヨク〳〵ヒカフベキ事也（愚管抄・巻第六・後鳥羽）

(14)随分ノ利益面々ニムナシカラズナン有ケリ（沙石集・一ノ二）

(15)世クタレリトイフトモ随分ニ佛ノ制戒ヲモ守リ大乗ノ修行ヲコタラスハ我眼精ヲマホルカコトクマホラント佛ノ御前ニテ誓ヲ發セル（沙石集・九）

三

中世の軍記物語には、「随分に」の「に」がない語形がもちいられ、同時に「分相応に」という意味が薄れ、より程度的なものになっているようである。この段階におよんで副詞として完成したといえよう。平家物語には六例現れるが、次の五例のかかり先は(16)「口入をもて」(17)「悲涙をおさへ」(18)「執り申しか」(19)「芳心せられて」(19)恩をかうむりしか」といった動作性の語句であり、「できるだけ、精一杯」の意味で用いられていると思われる。

(16)「康頼法師が事はさる事なれ共、俊寛は随分入道が口入をもて人となたる物ぞかし…（覚一本平家物語・巻第二）

(17)まづ内府が身まかり候ぬる事、当家の運命をはかるにも、入道随分悲涙をおさへてこそ罷過候へ。（覚一本平家物語・巻第三）

(18)次に、中納言闕の候し時、二位中将の所望候しを、入道随分執り申しか共、遂に御承引なくして、関白の息をなさるゝ事はいかに。（覚一本平家物語・巻第三）

(19)随分同齢どもにも芳心せられてこそまかりすぎ候しか（覚一本平家物語・巻第十）

(20)「東国北国の物どもも随分恩をかうむりしかども、恩をわすれ契を変じて、頼朝、義仲等にしたがひき（覚一本平家物語・巻第十）

なお次の一例は、「一として心にかなはずといふ事なし」がすでに「一として…なし」の呼応を持っているので、「随分」はこの句全体に係るのであろうが、右の四例と同じ意味では解釈しがたい。

(21)此句には粟散辺土なりといへども、忝く十善の餘薫に答へて、万乗のあるじとなり、随分一として心にかなはずといふ事なし

（覚一本平家物語・潅頂巻）

「万乗のあるじ」というその身分に相応して、「一」として心にかなはずといふ事なし」なのであろうが、あることがらが、分に相応するということは、つりあいがとれているということであり、分に対してそのことがらが当然の事象であると認めることにもなる。するとこの例は、大漢和辞典に「當然さうである。もちろん。」と記されている唐代の口語の用法に通じるものと考えられそうである。

『保元物語（岩波古典文学大系・金刀比羅宮蔵本）』には次の三例が見られる。

(22)伊藤六はや射おとされ候ぬ。奴にも随分さねよき鎧をきせて候つるものを。（保元物語・中）

(23)是をば随分目はづかしき者共にて有物を。人に語らんことのはづかしさよ。口惜事かな。（保元物語・中）

(24)大臣は此世にても、随分意趣深かりし人なれば、苔の下迄さこそ思はるらめ。（保元物語・下）

いずれも「よき」「目はづかしき」「意趣深かりし」といった状態性の語にかかって、その程度がかなりであることを表す用法であり、現代語の「随分」に等しいようである。しかし、保元物語の文保本および半井本では、該当の箇所に「随分」の語は見られない。したがって、この用法は、室町時代以降のものである可能性が高いと考えられる。なお(24)の箇所は次のようになっている。

ナノメナラス此世ニ執深カリシ人ナレハ無跡マテモサコソ御座ラフ（影考館蔵半井本保元物語・下巻）

室町期の『義経記』には、次の2例がみられる。

(25)先祖の恥を清め、亡魂の憤りを休め奉る事は本意なれども、随分に位殿の気色に相協ひ奉らんとてこそ身を砕きては振舞ひしか、（義経記・巻第四）

(26)屋嶋、摂津国、長門の壇浦、吉野の奥の合戦まで、随分身をば亡き物とこそ思ひつれども、その期ならねば今日まで延びぬ。（義経記・巻第六）

(25)では「随分に」の形で、「位殿の気色に相協ひ奉らん」という意志の表現に係り、(26)は「随分」の形で「身をば亡き物とこそ思ひつれ」という完了態の動詞句に係る。(25)はその意志表現を強める「できるだけ」の意味とするのが妥当であり、(26)はことがらとして捉えた事態の程度をはかるものであろう。

次の例も、程度がかなりのものである意を表すものと言ってよいであろう。

(31)されば、主の心には、随分花ありと思へども、人の目に見ゆるゝ公案なからんは、田舎の花、藪梅などの、いたづらに咲き匂はんが如し。（風姿花伝）

(32)たとひ随分極めたる上手名人なりとも、この花の公案なからん為手は、上手にては通るとも、花は後まではあるまじきなり（風姿花伝）

この期の副詞としての「随分」は、「できるだけ、精一杯」の意味を表すものと、程度がかなりのものであることを表すものの二用法をもつといえよう。

四

次に、抄物にみられる「随分」の用法をあげる。ここでは〈随分

ノ［体言］〉の形で、「相当に立派である、すぐれている」ことを表す用法が多くみられるのが特徴的である。

(33)謙岩モ随分ノ作者也（中華若木詩抄　上20ウ）

(34)珪ハ楚ノ随分之官ソ相ホトノ者ソ（史記抄　一〇・45ウ）

(35)随分ノ在位ノ人カ徳ヲ好マイテ美色ヲ好ソ（毛詩抄　七・12オ）

(36)此大将ハサル人チャ随分ノヒトチャ京ニイラレタ時ハ活計ヲセラレタカ今ハタ、ハイラレヌヨ（毛詩抄　九・23オ）

また、〈随分ト思〉という表現も多くみられ、これも相当にすぐれている意で用いられている。

(37)我ハ随分トヲモヘトモ。人カ云コトハ。マヅハ。ヲサナガマシキコトヲセラル、。（中華若木詩抄　中15ウ）

(38)恵蒿カ随分ト思テ作タル…ト云フ句アリ（中華若木詩抄　下2オ）

(39)此以上ノ四句ハ皆小人トモノ妄ニ我カ所依ヲ随分ト思処ヲ云ソ（四河入海　十八ノ二26ウ）

(40)サル程ニ如此云処テハ善ノ随分ト思処スラクツレテノクルソ　況不善ノ心ハ萌シテ起ル事ハアルマイソ（四河入海　二十ノ四42オ）

これらの「随分」は、「分相応」の範囲内でのプラス評価ではなく、積極的に高い程度ですぐれていることを表す意味をもっているのであり、漢語の「随分」の原義からははなれている。

「随分」の副詞としての用法については、(A)依頼・命令や意志の表現に係るもの(B)動作性の語句に係るもの(C)状態性の語句に係るものがある。(A)(B)の「随分」は「できるだけ、精一杯」の意味を有しており、(C)は程度がかなりであることを表すと解釈できる。

(A)依頼・命令、意志の表現に係る例

(41)聘ストハ禮ニイッテコナタヘ御出アレ随分用ト云コトソ（蒙求抄一46オ）

(42)大事ノ事テ候ホトニト云テイケンヲハエ云候マイト云者モ随分意見申サウト云ソ（蒙求抄二33ウ）

(43)今我獄中ニ入テアレハ随分節ヲモ不可屈ト思タレトモ入獄テハモトノ威モ損盡ソ（四河入海五ノ三29ウ）

(44)何事テマリ随分御意ニ違ウマイトシテレハソナタニハ心カ専一ニハ無テ二三ニ心ヲ持テステラル、ソ（毛詩抄　31ウ）

(45)辛労ヲ随分セラレヨ（毛詩抄　九6オ）

(B)動作性の語句に係る例

(46)尚書湯王ノ徳ヲ美ル時斉聖廣遠トホメタソ随人ヲホムル時云時アリサレトモコ、サノミ成人テハナイソ（毛詩抄　一二30ウ）

(47)随分申セ共耳ニキ、入ラレヌソ（毛詩抄　一八12ウ）

(48)随分ツ、シウテ居レトモ讒言カヲ、イソ（毛詩抄一一8オ）

(C)状態性の語句に係る例

(49)随分ヲリシリガヲニ夕陽ニナリタルハ御オキアレトススムスヤウナゾ（中華若木詩抄中6オ）

(50)蒲鞭ヲ用ハ随分ヨケレトモ一向無事ノ時ハ蒲鞭モ不入ソ（四河入海　二一ノ三49オ）

(51)一尺ハ随分長ケレトモ一尺ヨリ上ノ用ニハ短テ用ニ不立ソ（史記抄　一一・11ウ）

(52)臣為ノ随分ヨイ事ト思テカウシタカワルイスマシイ事テサウケルト云ソ（史記抄　一一・92ウ）

(53)是ハ随分ヨケレトモナヲ造作ナレハ東坡ハ只熟睡シテナニヲモ不知シテ（四河入海　五ノ一19オ）

(A)(B)(C)ともに、「随分」は程度を示すが、(A)の依頼・命令や意志の表現に用いられるものは、実現すべき程度を測り、(B)(C)はコトガラおよびサマの現実の程度を測る。したがって(B)の「できるかぎり、精一杯」の意味は、極めて(C)と同様に「程度がかなりであること」と近いものとなる。

また、程度がかなりである意味の「随分」が、多く逆接の従属節に使われていることも注目される。(50)(51)(52)などでは、「ヨイ」程度や「長イ」程度がかなりであることを表しているが、逆接のあとの「一向無事ノ時ハ蒲鞭モ不入ソ」「一尺ヨリ上ノ用ニハ短テ用ニ不立ソ」などの表現は、「ヨイ」程度「長イ」程度の高さがある限度付きで、プラス評価されていることに対応する。したがって、この時代の「随分」の示す程度は、現代語のものよりもやや低かったのではないかと思われる。

五

次に、江戸時代の狂言台本などにみられる例をあげる。ここでも係り先では(A)依頼・命令、意志の表現に係るもの(B)動作性の語句に係るもの(C)状態性の語句に係るもの、意味の上では「できるかぎり、精一杯」の意味で用いられているものと、程度がかなりであることを表す用法にわけられる。

(A)依頼・命令、意志の表現に係る例

(54)鞍覆は乗敷して、随分捨てないがよいぞ（雑兵物語）

(55)誰とても、後世を願ふほど結構なことはなけれども、ことに女郎は罪が深かろ程に随分勤めの暇には後世を願や。（難波鉦）

(56)お心やすふおほしめせ、随分御馳走申さう（虎明本狂言・粟田口）

(57)きうくつなり共、あすまでいてくれひ、しぜん山のかみがきて、此小袖をとれと云共、かまひてとるな　随分とりまらすまひ（虎明本狂言・はなご）

(58)もそっとじゃ。随分急がしめ。（虎寛本狂言・あはた口）

(59)随分此度は　はよふ帰らふぞ（続狂言記・になひ文）

(60)娘はもたず天にも地にもたったひとりの花よめ、まづごの水とらるゝも、こつひろわるゝもそなた、ずいぶんかう〳〵にしてたも（心中宵庚申）

(B)動作性の語句に係る例

(61)其事で御ざる、某も随分爰かしこを才覚致が、坊主はあまた御ざれども、然しつべし出家が御ざなふて、（虎明本狂言・腹不立）

(62)夫より狐一の松へ出るときも随分頭を下げ目を付けて居る。（虎寛本狂言・釣狐）

(63)扨もかわひ事でござる、我も久しうなじうでござれば、随分取合を申て見たれ共、つゐに御がってんもまいらず（虎明本狂言・ぶあく）

(64)私も随分がくを仕たれ共、今までかみなり殿のれうじのいたしたうをならはなんで御ざる（虎明本狂言・かみなり）

(65)親のきらふ女房にずいぶんとかう〳〵つくし、親には不孝つくしや（心中宵庚申）

(C)状態性の語句に係る例

(66)随分発明にて、つよい女郎でござんすが、（難波鉦）

(67)それはうれしうござる。こなたの仰らるゝほどならば、随分きれいになくは、さやうに仰られまい、その事で御ざる今日むこ入を致す（虎明本狂言・鶏聟）

(68)なふおそろしや、あれにばけ物が有、大仏のしゃかゞ、随分おうきひと存したがそれよりおうきな（虎明本狂言・なまぐさ物）

(69)中々、しゅすのきゃはんをふ断仕てゐる程に、随分くろふ御ざる（虎明本狂言・粟田口）

(60)と(65)は、よく似た文であるが、(60)のほうは、「孝行にしてくれ」という依頼の表現に関わり、(71)のほうは、孝行を尽くす程度に関わると思われる。その他の(B)の例も、かなりの程度を表現する意味合いの強く感じられる例である。このようなところから、次第に程度の表現に傾いていったのではないかということがかんがえられる。

また、抄物に多くみられた、「相当にすぐれている」ことを表す「随分の人」「随分と思」のような用法は見当たらなかった。連体修飾語となっている例は、

(72)随分の遊びすきひとつなる口のおとこ、（本朝二十不孝　五）

があるが、これは「遊び好き」の程度がかなり高いことをあらわすものであり、抄物において連体修飾に用いられたものとは意味が異なっている。

六

明治時代以降も、A，B二つの用法がみられ、『改正増補　和英語林集成第三版（明治一五年）』に、「随分」の意味は次のように記されている。

ZUIBUN　ズヰブン　随分 adv tolerabiy'as good as circumstances will admit of' pretty well' as much as possible ; zuibun yoku nari-masho'it will do pretty well ; zuibun jozuni natta' has become pretty ; zuibun ki wo tsuke yo'beas careful as possible.kanari'yoku.

佐伯哲夫氏の調査によると、この後大正時代末まで、「できるだけ、精一杯」の意を表す物とかなりの程度を表すものとの両用法が見られるが、後者のほうが優勢であり、係り先はサマ的なものが優勢となるという。

以上に見てきた「随分」の用法の変遷を、簡単に述べると、

1　「それぞれ、分に応じて、分相応に」という意味で使われる。（平安時代，源氏物語、仏教説話集）

2　「分に応じた範囲の中の精一杯、できるかぎり」と程度的にプラス方向の意味をもつ。（平安時代，源氏物語～鎌倉時代，軍記物語）

3　「できるかぎり」の意味の用法と、程度がかなりであることを表す用法を持つ。（室町時代，軍記物語、抄物資料～江戸時代）

4　程度がかなりであることを表す用法に偏っていく。（明治・大正時代）

というものである。

七

次に、「随分」と意味用法の上で，類似する語をいくつか挙げたい。

《涯分》

漢語「涯分」は現代語では使用されていないが，かつて「随分」とよく似た意味用法を持っていた語である。大漢和辞典には「かぎ

り。身分相応の程度。本分」とあって、名詞としての用法しか示されていない。わが国においても、やはり名詞としての用法が初めにみられる。

(1)涯分浮沈更問誰〈がいぶんふちんさらにたれにかとはむ〉
（菅家文章　巻三）

(2)「正成、不肖ノ身トシテ、此一大事ヲ思立テ候事、涯分ヲ不計ニ似タリトイヘ共、勅命ノ不軽礼儀ヲ存ズルニ依テ、身命ノ危キヲ忘タリ（太平記）

(3)諸芸をなす人、面々我意分の所得有（拾得玉花）

(4)下三位等、みな〳〵、その位を得たらんにまかせて我意分あるべし。（拾得玉花）

(5)上臈はそのふるまひ、下女はその分にて、おの〳〵のふるまひをいたす事こそ、我意分〳〵のふるまひなれ（拾得玉花）

(6)我身の無道心をかへり見て、往生をうら思と、涯分を不顧、決定往生を思と何がよく候べき（一言芳談）

(1)(2)(4)(6)の「涯分」は、自分の本分という意味の名詞として主語、目的語となっており、修飾語的な「随分」には見られない用法であるが、(3)(5)の例は、「随分の」の用法と類似し、言い換えてもさほど不都合はない。

この語が副詞として用いられた例がみえるのは、「随分」よりも時代が下る。そして、次にあげる例にみられるように、「できるかぎり、精一杯」の意味で使われており、意志や命令・依頼の表現を伴う場合が多数を占める。

(A)依頼・命令、意志の表現に係る例

(7)細々ニ音信ヲシテソチカワルサマナラハコチヘナントキモワタレ涯分扶持ヲクワヨウナント、云ソ（史記抄　二十一27ウ）

(8)此ニハアマリ亡命ノ人カ多クアッテ大義ニオリサフスレハ少々我等カ方ヘタマワリテ涯分養申フ（史記抄　十六25ウ）

(9)臣下ノカヲ盡イテ涯分タスケマラセウスナラスハ腹ヲ切マテ
（蒙求抄　五6オ）

(10)然則我ハ計略ヲハ涯分セウスホトニ兵法ハナラハストモト云ソ
（蒙求抄　五74オ）

(11)辛労ヲ随分セラレヨ　ソノ鳥ノコトクニアラウソ　カイ分ツトメサシメト励ス心ソ（毛詩抄　九6オ）

(12)カイ分堪忍セイソ（毛詩抄　九20ウ）

(13)あら嬉しや、涯分舞を舞ひ候（謡曲　道成寺）

(14)涯分祈ってかの女人をもたすけ。鐘を鐘楼へ上ぐべしと。
（浄瑠璃　用明天王職人鑑）

(15)涯分（がいぶん）亦云随分（書言字考節用集）

(B)動作性の語句に係る例

(16)先生ノ意涯分忠義ヲ守レトモ天下ヲシナメテ悪ナル程ニ定テ我亦アシクナラウスト云也（四河入海　十七ノ三7ウ）

(17)初心ノ者ヂャ程ニ主ニ涯分奉公シテ使ワルレドモ主ガ信トモ思ハヌゾ（周易抄　四56ウ）

「身分相応の程度」から、その分に応じた「できるだけ、精一杯」の意味への移行は、「随分」と共通する。しかし、「涯分」の副詞としての用法はこれにとどまり、「随分」のもう一つの用法である、状態性の語にかかってその程度を強調する用法はみられない。また、

体言として、相当優れていることを表す用法も生じていないようであり、用法のひろがりは「随分」よりも小さい。そして、「随分」が近世以降も多く用いられていくのに対し、「涯分」のほうは衰退している。

《相当》

「相当」という語もまた、漢語本来は『大漢和辞典』に、「①あひあたること。互いにあふこと。②力が互いにつりあふこと。優劣がないこと。相応。匹敵。五分五分。③あてはまること。理にかなふこと」と記されるように、ちょうどつりあう程度を表すものであったが、程度的にプラス方向の意味を表すようになり、さらに程度副詞の用法を持つにいたったものである。この語が副詞として用いられるようになったのは、比較的最近であり、以前は次のように、「当てはまる、合致する」意味で用いられている。

(1)四気おり〳〵、日夜、朝暮、貴賤群集の多少、廣座・少座の當気によりて、藝人の時機音、時の調子の五音、相当せずは、當気和合あるべからず。(拾得玉花)

『日葡辞書』には、「Soto. サウタウ(相当) aiataru. (相当たる)ふさわしいこと、あるいは、あてはまること. :Sato xita soto. (相当したこと)ふさわしいこと」とあり、『改正増補和英語林集成　第三版』にも「Soto サウタウ 相當　suitable, prorer, fitting, becoming, accordubg : ano hito ni ——— na yaku, an office suitable to the man; ——— suru, to be suitable.」と記されており、ここにはまだ程度的にプラス化した意味は記されていない。

明治時代には、

(2)此男はこれが道楽である。赤シャツ相当の所だろう。(「坊ちゃん」)

(3)彼は加持、御封、虫封じ、降巫の類に、全然信仰を有つ程、非科学的に教育されてはいなかったが、それ相当の興味は、何れに対しても昔から今日まで失はずに成長したおとこである。(「彼岸過迄」)

(4)僕の室に置いてある荷物を始末したら、行李の中には衣類其他が悉皆這入ってゐますから、相当の金になるだろうと思ふんです。(「彼岸過迄」)

の例にみるように、ある人物、もの、こと、などの条件にふさわしいこと、当てはまることを表す意味で使われているが、(3)(4)のような例は、程度がかなりであることを表す用法に近い。

今日では、「当てはまる、ふさわしい、合致する」意味の用法以外に、

(5)勘定を、四千百二十五円とられたのは、是非もないことだったが、駒子には相当いたかった.(「自由学校」)

(6)都の強引なやり方に都民は相当頭にきているんじゃないですか。(「文藝春秋」1993・12)

のような、程度がかなりであることを表す程度副詞用法も一般にみられる。また、

(7)堂々たる体格のお陰で、どうやら、相当の紳士らしく見えてきた。(「自由学校」)

のように、「優れている、立派である」ことの程度がかなりである意味を表すこともあり、「随分」の抄物資料にみられる「随分ノ人」の用法と類似する。

副詞「随分」などについて

また、この語は現代中国語でも、転化した用法として、程度が高いことを表す用法を持つらしく、その点も興味深い。

《かなり》

「かなり」は、「よいとして許す意味の『可』に断定の助動詞『なり』のついてできたもの」（「日本国語大辞典」）とされ、

(1)彼ハ図南の門人で書体も可なりにできヤス。俳諧もさうおうにやりやす。（「安愚楽鍋」二編・上）

のように「相応」と並んでまずまずの程度を示したものが、高い程度を表す用法へとやはりプラス方向の変化が見られる語である。『和英語林集成　第三版』では、

「KANARI　カナリ　可也　advtolarably, middlingwell, possiblywill do.」と記されており、まずまずの程度を表すようだが、次の例になると、現在の「かなり」同様、きわめてではないが高い程度を表しているようにとれる。

(2)可成野鳥にも出逢った。（「めぐりあひ」）

(3)代助は二人の子供に大変人望がある。嫂にも可なりある。兄には、あるんだか、ないんだかわからない。（「三四郎」）

(4)「頭も悪いほうじゃないだろう。学校の成績も可なりだったんじゃないか」（「三四郎」）

(5)先生の哲学を鼻から烟にして吹き出す量は月に積もると、莫大なものである。「煙草だけは可なり呑むが、その外に何にも無いぜ。（「三四郎」）

なお、学生（梅光女学院短大二年生）の指摘によると、「とても」や「非常に」相当の程度表現として、「かなり」をよく使うが、従来頭高型のアクセントであった「かなり」を平板型「かなり」と発音するようになったという。[注4]

《よほど》

現代語では「よほど」「よっぽど」の二語形があり、使用できる文型に制約をもつ。

①「…なのは、よほど…なのだろう」「よほど…らしく、…である」のように、ある事態・状態に対する、原因・理由の推定を表す場合。

②「よほど…でなければ、…だろう」のようにある事態・状態となる、条件を示す場合。

③「AはBよりよほど…である」のように、比較の構文に立つ場合。

④「よほど…しようかとおもった」のように、ある行動をとろうと思う気持ちを強く持ちながら、実際にはその行動の実現をとりやめたことを表す場合。

ほぼ、以上のような文型に限られ、「このケーキはよほどおいしい」のように、比較や推量を伴わずに程度副詞として用いられることはほとんどない。

この語のもとの語形は「よきほど」であるとされる。ほどよい程度・適度を表したが、

(1)位は勝りたれども、これは叶はぬことあり。さりながら、これもたゞよき程の上手の事にての料簡なり。まことに能と工夫との極まりたらん上手は、などかいづれの向をもせざらん。（風姿花伝）

のように、きわめてではないがかなり高い程度を表すようになっている。副詞としての用法は、

日葡辞書に、

Yoppodp. Yoqifodo ヨッポド、または、ヨキホド　大方．あらまし．例，conocotouo yoppodo qiqi fataita.（このことをよっぽど聞き果たいた）私はこの事をあらましは聞いた十

また，都合よく，ほどよく．例，xirono fuxinuo yoppodoni xinaita.（城の普請をよっぽどにしないた）私は城の工事をほどよい程度に行った。

と記される。そして江戸時代には、次のように副詞としても次のようにかなり高い程度をあらわすようになり、現代語と同様の比較の構文もみられる。

(2)儒者といふ奴は餘程博識な者だと思つたら。一向しきなトンチキだぜ（浮世床・初編上）

(3)論語読の論語しらずよりか。論語よまずの論語しらずの方がよっぽど徳よ（浮世床・初編中）

そして、和英語林集成には次のように記述されており、高い程度を表す副詞としても用いられたことがうかがえる。

YOHODO ヨホド adv. A great deal, good many : almost,nearly : for the most part:very :（和英語林集成第三版）

この時代には、次の(4)(5)(6)のように、現在の「よほど」と文型を同じくする例が多数を占める一方、(7)(8)(9)のように、推量や比較の表現を伴わずにかなりの程度を表す用法も見られる。

(4)釣りをするよりこの方が余っ程洒落ている。（坊ちゃん）

(5)よく先生が品切れにならない。余っ程辛抱強い朴念仁がなるんだろう。（坊ちゃん）

(6)よっぽど撲りつけてやろうかと思った。（坊ちゃん）

(7)字がまずいばかりではない、大抵平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだか句読をつけるのに余っ程骨が折れる。（坊ちゃん）

(8)日はもうよほど高く二本の青い日光の棒もだいぶ急になりました。（銀河鉄道の夜）

(9)「時にこの池は余程古いもんだね。全体何時頃からあるんだい」「昔から？どの位古い昔から？」「何でも余っ程古い昔から」（草枕）

なお、(7)～(9)のような場合でも、何か程度をはかる基準があるような、係り先の語彙的な制限があるようである。これ以後用法が縮小していく過程については、別稿に述べたいと思う。

八

ある対象の持つ資質にふさわしい、つりあうことを表す語が、より高い程度を表す程度副詞として使われるようになる変遷過程をいくつか挙げてきた。これらの副詞の現在の用法の比較・対照や、程度の高さのはかり方に関する分析、類義語との交渉など、今回考察に及ばなかった点は今後の課題としたい。

注1．佐伯哲夫（１９８０）は、三遊亭円朝の「怪談牡丹灯篭」にみられる「随分」の用例を次のように分類している。なお、佐伯氏の挙げられた用例はSを付し、抜粋して記す。

〈1〉「できるかぎり」などの意義を持って、話し手の意志や命令・依頼などのムードに係る用法

S①誠に多端ではあるが閑暇の節は随分教へても遣らう

S③心丈夫に身を厭ひ随分大切に奉公しろ
S⑤お前も随分身体を大事にしてください
〈2・A〉「大いに、十分」などの意義を持って、話者の予測に関わっている用法
S⑦マー少し落ち着けば風がはいって随分涼しくなります
S⑧御酒も随分気を散じますから
〈2・C〉結果的状態に視点をおいて、そのコトの程度のひとかたでないさまを表す用法
S⑨おれも随分道楽をした人間だから
S⑩若くって独り者で居るから、随分女も泊まりに来るだらう
S⑫幽霊に出逢たなぞと云ふことも随分あるが
〈2・D〉サマの程度やコトの起こる傾向の程度が相当に大きいことを表す用法
S⑮不義淫奔は若い内には随分ありがちの事だが

そして、次のように分析している。

「これでわかるのは、牡丹灯篭における副詞「随分」は、主観ないしは主体的（1、2A）、客観的（2C、2D）表現の別なく、コト、モノ、サマの頻度や量や程度の相当なことを言ったが、今日では主観的ないしは主体的表現のそれが衰滅し、客観的なコト、モノ、サマの頻度や量や程度の相当なことを言う語に用法を縮小してきていることである」

注2　小野正弘（1985）は中立的な意味を持つ語がプラスあるいはマイナスの方向に傾いていく語義変化の類型に属する語を集めて一つの語群として、それらの共通性・非共通性を確かめることを提案している。

注3　和漢朗詠集の諸本に関しては、今西祐一朗先生の御教示をいただいた。

注4　頭高型「かなり」と平板型「かなり」とで、用法に違いがあるのか、アンケート調査（梅光女学院短大二年生43名対象）を試みたが、例文の可・不可の判断に平板型「かなり」自体を「おかしい」と感じる判断が混じってしまったようで、正当な結果が得られなかったため、再度の調査を期したい。

〈参考文献〉

佐伯　哲夫（1980、1989）「副詞『随分』における用法の変遷」（『国文学57』、『現代語の展開』和泉書院）
小野　正弘（1985）「中立的意味を持つ語の意味変化の方向について―「分限」を中心にして―」（『国語学』141）
原田　芳起（1962）「注釈の混態について『あふなあふな』と『おほなおほな』」（『平安時代文学語彙の研究』風間書房）
山口　佳紀（1985）
『古代日本語文法の成立の研究』第一章第二節　語頭子音の脱落
小林可奈子（1992）「二つの節を前提とする副詞の意味分析について―『あまり』『よほど』『いったん』を例として―」（『都大論究』29号）
小林可奈子　「『よほど』『よくよく』の意味分析」
渡辺　実（1987）「比較副詞『よほど』について―副用語の

意義・用法記述の試み―」（『上智大学国文学科紀要』第4号）

〈本文中に記したもの以外の主な資料〉

『国訳大蔵経』第一巻、栃尾武編『国会図書館蔵和漢朗詠集　内閣文庫蔵和漢朗詠集漢字索引』新典社、栃尾武編『貞和本和漢朗詠集』臨川書店、池田亀鑑編『源氏物語大成』、「今昔物語集」「愚管抄」「宇治拾遺物語」「平家物語」「保元物語」「義経記」「風姿花伝」「菅家文章」「拾得玉花」（『日本古典文学大系』岩波書店）、『慶弔十年古活字版沙石集総索引』勉誠社、『中華若木詩抄』勉誠社、「史記抄」「毛詩抄」「蒙求抄」「四河入海」『抄物資料集成』、『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社、『大蔵虎寛本能狂言』岩波文庫、『狂言記の研究』『続狂言記の研究』『狂言記拾遺の研究』、『近世文学総索引　井原西鶴』『近世文学総索引　近松門左衛門』教育社